

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 320



1998 JULY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

未踏峰（カバン 6,717m）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1999年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負担金:95万円

チョム・カンリ（7,048m）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第

ニンチン・カンサ（7,206m）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:80万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

ハチンダール・チッシュ（7,163m）西面のピラーを登り頂稜に続く稜線に飛び出ると、眼前にH A J隊が挑んでいるバトゥーラⅢ（旧Ⅱ峰7,729m）の南面の雄姿が広がっていた。H A J隊は当初写真正面の岩稜を攻めたが左手雪壁に変更し初登頂に成功した。（記：山森欣一）

ヒマラヤ No.320

1. ネパール国際山岳博物館建設支援募金のお願い

2. H A J 創立30周年記念講演(3)

「インド・ヒマラヤ概要」

ハリシュ・カパディア

9. 月刊「ヒマラヤ」表紙写真「山」一覧表（280号～318号）

10. 1998年パキスタン登山隊一覧表（追加）

10. H A J 図書と地図の販売

11. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・Books・ヒマラヤから〉

15. 中国高峰登山15年小史（18）西藏（4）

17. 平成10年度 日本ヒマラヤ協会通常総会報告

24. 事務局日誌

ネパール国際山岳博物館建設支援募金の

— お 願 い —

登山愛好者にとっての憧れの山・ヒマラヤはネパール王国をはじめとする国々に聳え立っております。日本の多くの登山家がエヴェレストに代表されるネパールとその国境上に聳え立つ7000m、8000mのヒマラヤの山々の山頂に足跡を印し、幾多の感動的なドラマを生み、また悲しい思いをして参りました。

それらの登山のたびにネパール王国とネパールの人々には言葉では言い尽くせない程お世話になったことは言うまでもありません。

さて、ネパール山岳協会（NMA）は人類最初の8000m峰登頂となったアンナプルナの山々を眼前に見るポカラの町に「国際山岳博物館」を建設し、「山、登山、環境ならびに民族誌学的な遺産を後世のために保存する」、「ネパール・ヒマラヤに関連する山と登山についての調査・研究・出版物の発行を推進する」等々により、世界の山岳文化を育て、発信しようとの遠大な構想を打ち出しました。

ネパール山岳協会は10数年前に、ポカラ空港近くに48ヘクタールという広大な土地を取得し、その準備を進めて参りましたが、1995年10月に起工式を行い、『ネパール観光年』である本年98年9月27日の「ネパール観光の日」に博物館落成式を行うべく、現在大きな博物館の本館の建設が進められております。

その総費用が約4億円必要とされているため、ネパール山岳協会ではこの建設費の一部について、日本の関係団体にも支援を要請して参りました。私共はヒマラヤ登山やトレッキングで知ったネパールの人々の素朴で温かい心やもてなしに少しでもおこたえしたい、お返ししたいと考えました。

その博物館建設の強力な推進者でありました、ネパール山岳協会ダワ・ノルブ・シェルパ会長は、昨年10月28日に急逝されてしまいました。ネパール山岳協会としてはダワ・ノルブ氏の遺志をついで完成させたいと頑張っております。

そこで私共は日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本・ネパール協会の6団体による「国際山岳博物館関係団体連絡協議会」を組織し、募金の進め方などについて話し合いを進めて参りました。

本年1月に建設中の山岳博物館を見、ネパールにある数多くの博物館を視察した日本人の博物館学芸員の評によりますと、内容を充実させれば「ネパールに随一」の博物館になるだろう、と太鼓判をおして下さいました。

募金目標額は総費用の一割の4000万円といたし、登山者、トレッカー他ネパールと関係のある、あるいは関心のある法人、個人をはじめとする多くの皆様に呼びかけて参りたいと思います。2万円以上の寄付をされた方々には日本山岳協会より免税の措置をとる予定です。お申し出下さい。

皆様には趣旨をご理解いただき、ネパールと私共の変わらぬ友好のために協力をお願い申し上げます。

国際山岳博物館関係団体連絡協議会

会長 坂口 三郎

〔(株)日本山岳協会会長〕

(株)日本山岳協会

日本勤労者山岳連盟

(株)日本山岳会

日本ヒマラヤ協会

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

日本・ネパール協会

※銀行振込

富士銀行渋谷支店
普通 210-3141016
ポカラ国際山岳博物館
協議会

※郵便振替

00140-4-13926
ポカラ国際山岳博物館
連絡協議会

インド・ヒマラヤ概要

ヒマラヤン・ジャーナル編集長 ハリシュ・カパディア

ヒマラヤ、カラコルム及びヒンズー・クシュは、東はナムチャ・バルワから西はアフガニスタン国境に及び、政治的には中国、インド、ブータン、ネパール、パキスタンそしてアフガニスタンなどの国々に属している。そのかなりの範囲はインドに属しており、カラコルムの内広範囲に渡る東部カラコルムもまたインド領となっている。

インド・ヒマラヤは以下の地域にわけられる。

1. アルナチャル・プラデシュ
2. シッキム
3. クマオン
4. ガルワール
5. キンナウル
6. ラホール
7. スピティ
8. キシュトワール
9. ラダック&ザンスカール
10. カシミール
11. 東部カラコルム

インド・ヒマラヤに於いては8千m峰はカンチェンジュンガだけであるが、7千m台の山は数十座あり、その中には未だに未踏を誇っている峰も数座ある。また、6千m台の峰は無数にあり多くの登山者を迎えているが、手つかずの峰もまだまだ沢山ある。インドには登山や踏査の舞台が数限りなくある。

アルナチャル・プラデシュ

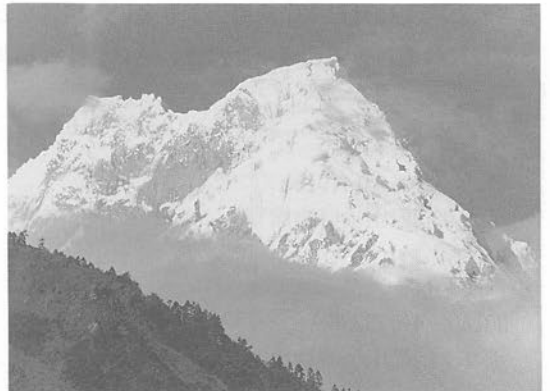
アッサム・ヒマラヤの別称で知られているこの地域での活動記録はそう多くはない。地域的にはゴリチェン(6,858m)～ナムチャ・バルワ(7,782m)の間である。政治上の理由で厳しい制限がある為、この地域で活動した登山隊はそう多くはない。高峰としては、ギャラ・ベリ(7,294m)、カント(7,090m)、ニェギェ・カンサン(7,047m)などが挙げられる。この地域の幾多の峰は中国のチ

ベット側から登頂されているが、インド側からの登山はわずか数隊によってしか成されていない。唯一ゴリチェン(6,858m)だけはインド側からの登山が一般的となっている。

この地を初めて踏査したのは、1939年F・キングドン・ウォード、F・M・ベイリー、H・T・モーズヘッドの一行である。H・W・ティルマンもまたこの地を訪れ、“Assam Himalaya Unvisited”を著している。F・M・ベイリー著“*No Passport to Tibet*”も非常に参考になる。この地域は、1962年に火蓋を切った中印紛争の煽りをまともに受けた地でもある。中国軍はベイリーの通ったルート沿いに南下し、セラ峠近くまで攻めいった。それ以降永年に渡って立入禁止地域となっていた。

シッキム・ヒマラヤ

シッキムの西部は高峰となってネパールと国境を接し、高峰の大多数が聳える北部は中国、ネパー



▲中国領ヒマラヤ、ギャラ・ベリ

ル両国と国境を接する。戦前の初期のころのエヴェレスト登山隊はみなシッキムを越えてチベット入りし、エヴェレストへと向かった。偉大なフランス・ヤングハズバンドのチベット遠征隊もシッキムを越えてチベットへ入域している。

ダグ・フレッシュフィールドはシッキムに初期の頃に入域した登山家の一人である。彼の著“Round Kangchenjunga”にはシッキム全山の古い記録が網羅されている。

西部シッキムには、カプルー(7,338m = 1935年C・R・クック登頂)の他、コクタン(6,147m)やラトン(6,678m)の様に後年になってから登頂された山々がある。タルン(7,349m)の様に、未だにシッキム側からの登山を試みられていない山は数多くある。

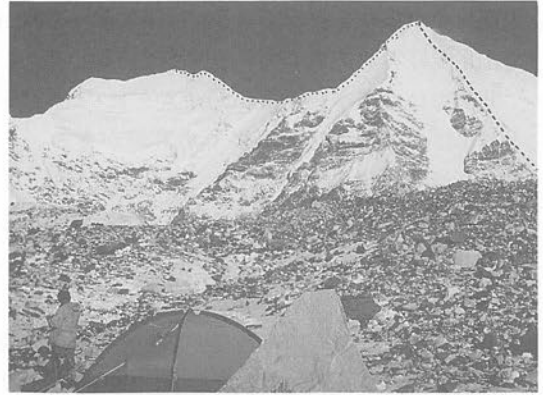
北部シッキムには、世界第三位の高峰カンチェンジュンガを源にするゼム氷河がある。パウル・パウアー率いるドイツ隊は第二次世界大戦前、東側から再三再四挑戦を繰り返した。そのルートは最終的には1977年インド陸軍隊により登頂され、その後幾度か登られている。ゼム氷河周辺には登攀意欲をそそるシムヴー(6,812m)やシニオルチュー(6,887m)などが聳えている。

更に北には1993年日本ヒマラヤ協会隊が初登頂したピラミッド・ピーク(7,123m)、ジョンサン・ピーク(7,473m)やチョルテン・ニマ(6,927m)などがある。東部にはドンキャ・リ(6,160m)のピナクルを従えたパウフンリ(7,125m)が魅力的に聳えている。シッキムは登山者に幅広い活動の場を与えてくれるに違いない。



▲ナンダ・カート

▼ピラミッド・ピーク



クマオン

クマオンは3つの異なる谷に分けられている。東側はネパールと国境を接しており、かつてはクマオンの一部だったガルワールと混同視されていた。実際には、イギリス統治下時代に分割され呼称を異にするまでは、ガルワールはクマオンの一部であった。

東部の最初の谷はダルマ・ガンガである。源頭部には登攀要素の強い6千m台の山々がある。ラジランバ(6,537m)やララ・ウェ(6,123m)などはこの谷から取り付ける。

中央部の谷はゴリ・ガンガである。東側の枝氷河としては1979年ハリシュ・カパディア率いる隊が初登頂したチリン・ウェ(6,559m)を源とするカラバランド氷河がある。その南には難攻不落のスィティラ(6,373m)が鎮座している。ミラム氷河源頭にはハルデオル(7,151m)、ティルスリ(7,074m)などの峰が聳えている。ナンダ・デヴィ東峰(7,434m)もこの谷から登られている。パンチ・チュリ山群は南東部に鎮座しており5つの峰から成っているが、東西両面から幾度か試登され、かなりの困難の末に登頂されている。

西部の谷はピンダリ・ガンガで、パンワリ・ドゥワール(6,663m)、ナンダ・カート(6,611m)がある。クマオンでは一番ポピュラーで、訪れる登山者も多い。支谷のスンドルドンガ谷はナンダ・デヴィ内院の南側に聳えている山々を源としている。

ガルワール

ガルワール・ヒマラヤはインド・ヒマラヤの中央部分のかなりを占めている。永年に渡って沢山の山岳愛好者やクライマーを迎えている。

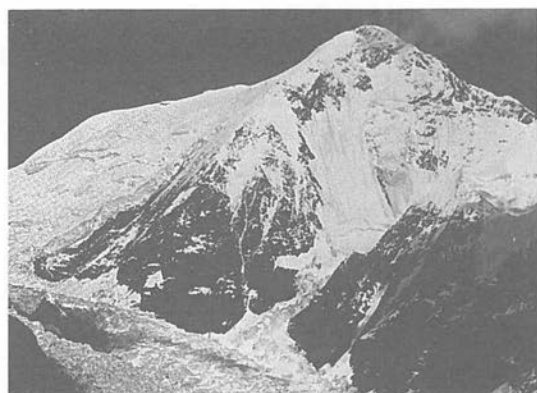
北部にはカメット(7,756m)やムクト・パルバット(7,242m)を始めとして多くの高峰がある。未踏の高峰も数多く聳えている。また、多くのヒンズー教徒が巡礼に訪れるバドリナート寺院がある。

ナンダ・デヴィ内院

リシ・ガンガの源は有名なナンダ・デヴィ内院であり、ガルワールの中心である。1934年までリシ・ガンガのゴルジュはヒマラヤで最も未知を秘めた地であった。ナンダ・デヴィ内院は周囲75マイル、高度6千m以上の障壁に囲まれており、その氷雪涵養区は実に380km²に及ぶ。ナンダ・デヴィ(7,816m)はインド・ヒマラヤで最も美しい峰である。1936年ティルマンとオデルにより初登頂された。1976年には日本隊により主峰～東峰間の縦走が成された。

内院周辺にはチャンガバン(6,864m)、リシ・パハール(6,992m)、ベタルトリ・ヒマール(6,352m)などがある。内院北部には40年振りに日本隊が入り数座で登山活動した。チャンガバン(6,864m)は1974年クリス・ボニントン率いる印英合同隊によって登頂され、その4日後にデヴィトリ(6,788m)がハリシュ・カパディア率いるインド隊に登頂されている。この山域でも数座は登頂されているが、特に北側にはまだまだ多くの山が未踏のまま残されている。

環境保護のため、現在もまだ登山者の入域は禁じられている。過去15年以内に許可を受けたのはイ



▲リシ・パハール

▼サトパント



ンド陸軍隊唯1隊だけである。再びオープンするのはいつか、現時点では定かではない。

ガンゴトリ

ガンゴトリには数多くの氷河がある。また、巡礼者で賑わうガンゴトリ寺院もこの地にある。約20年前に外国隊にもオープンされて以来、多数の外国登山隊を迎えている。ガンゴトリにはトレイサガル(6,904m)、ブリグパント(6,772m)、シヴリン(6,543m)、サトパント(7,075m)を始め、名の知られた山が数多くある。ガンゴトリ氷河源頭のチャウカンバ山塊もまた登山者の心を誘う。チャウカンバⅡ(7,068m)、Ⅲ(6,974m)、Ⅳ(6,854m)にも数隊が挑戦しており、この内の幾つかの南面から登られている。いずれも技術的にかなり難しい山である。

西部ガルワール

西部ガルワールには楽しく登れる山が多い。多くの登山学校の生徒や初心者は、ここでトレーニングを受けている。スワルガロヒニ山群は最も登攀技術を要する。バンダールプンチⅢ峰(6,102m＝西峰)やⅡ峰(6,316m)は幾度か登られている。ヒマラヤの中ではデリーから最も近く訪れやすい地域である。

キンナウル

ヒマチャル・プラデシュ州のキンナウル地区はシムラの北側である。現在、キンナウルからスピティに抜ける国道が開通している。近年国道の西側への入域は一切の許可は不要となった。ジョー

カンダン(6,473m)やマニラン(6,593m)を始めとする多くの山々がこの地域にある。バスバ谷東部にもティルンやレオ・パルギャル(6,791m)など大変興味を引く6千m台の山々が点在している。

スピティ

スピティはトランス・ヒマラヤの中では最も不毛の地である。東方には登攀困難と思われる、未踏を誇るスピティ最高峰のギャ(6,794m)が聳えている。過去に論議を醸し出し、話題となったシーラ(6,132m)も同じ谷筋にある。西方にはラタン、ギンディ、カメンガー各谷筋にカンラやタルボなどの山々がある。国道の西側の全山は外国隊にもオープンされている。

クル

こじんまりとしたクル谷には、高さよりも技術的困難を求める多くの登山者が訪れる。南パルヴァティ地域にはディビボクリ・ピラミッド(6,408m)、パプスラ(6,451m) P20,101(6,127m)など多くの山がある。この地域もムカル・ベー(6,069m)やインドラサン(6,221m)を含めて外国隊にオープンされており、多くの登山者を迎えている。

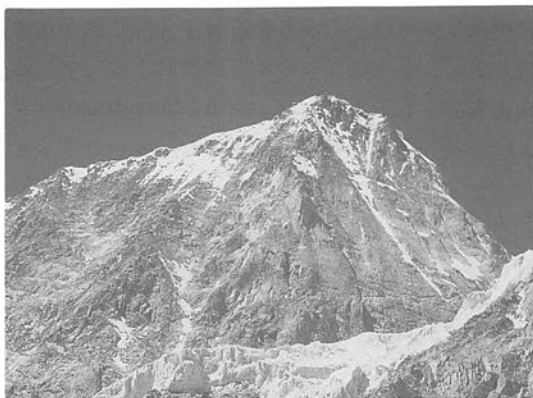
ラホール

有名なロータン峠を越えるとラホール谷である。早期に外国隊にオープンされ、幾座も登られている。バラ・シグリ氷河周辺にはクル・プモリ(6,553m)やシグリ・パルバット(6,626m)が聳えている。北側のチャンドラ・バーガ(CB)山群にはミナル(6,172m)やアケラ・キラ(6,005m)を始め、似通った標高で呼称番号の異なる多くの峰がある。西側には魅力あるファブラン(6,172m)やムルキラ(6,517m)が登山者を引き寄せる。ベースキャンプを置く殆どの谷はすぐそばまで車が利用できる。アプローチが非常に便利である。

キシトワール

チャンドラバーガ川がチェナブ川と名称を代えるラホールの西側がキシトワールである。現在非常に政情が不安なので入域が難しく、入域に際しては十分な調査が必要である。しかし登山者に

▼ジョーカンダン



とって入域がかなうならば、ブラマーI峰(6,416m)、II峰(6,425m)、シクル・ムーン(6,574m)、ハグシュー(6,300m)などで満足の行く登攀が楽しめるよう。

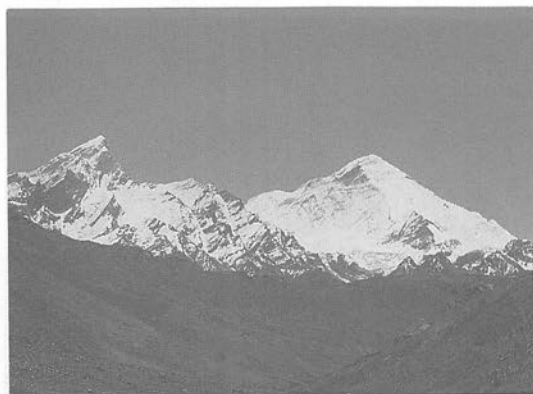
ラダック

ラダックは時として“小チベット”と呼称される。風景や文化もチベットとよく似ている。かつては沢山の隊商がレーを経由して中央アジアへと通った。現在、ラダックの谷の殆ど全てが外国登山隊にオープンされている。パンゴン湖のそばにはカクステット(6,442m)やパンゴン山群最高峰の無名峰(6,725m)が聳えている。

ラダック南東のルプシュ谷には、ツォ・モラリ湖周辺にルンセル・カンリ(6,666m)や隣接するチャムセル・カンリ(6,622m)など、6,600m前後の山々がある。

ザンスカール

かつてはラダックの南側に位置する、全土が不



▲ヌン、クン山群

毛の地であるザンスカールには簡単には近づく事は出来なかった。しかし現在は中央部に路が走り、最もポピュラーなトレッキングの場となっている。幾百ものトレッカーがザンスカール中央部のパダムへと通り抜け、今や世界一ポピュラーなトレイルとなった。

登山者にとってはヌン(7,135m)やクン(7,077m)を始め、ザンスカールI峰(Z1 6,181m)、ザンスカールII峰(Z2 6,175m)など興味の対象となる山が多い。

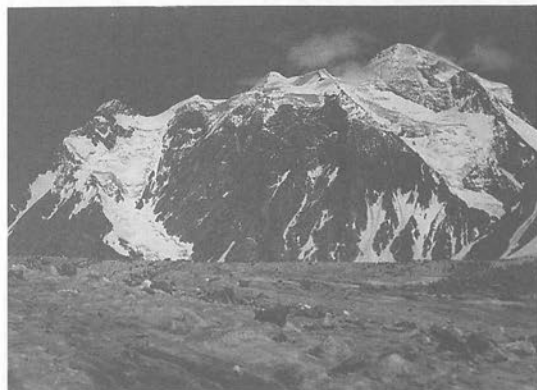
カシミール

美しいカシミール谷はトレッキングやキャラヴァンで知られている。南側にはコラホイ(5,425m)やハラムク(5,143m)などさほど高くない山々があり、初心者にも簡単な登山が楽しめる。ソナムアルグ周辺を広範囲にわたって訪れたイギリスのクライマー達がヒマラヤン・クラブに役立つこの地をこと細かに紹介した“The Climbers Guide to Sonamarg”を刊行している。

東部カラコルム

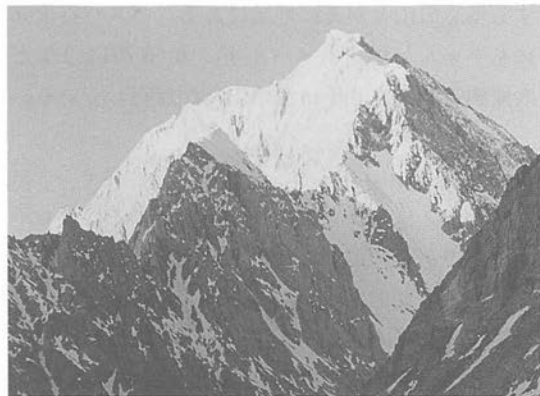
東部カラコルムはインド最北部の山域である。この地域はグレート・カラコルム山脈の特殊な山群を成しており、数多くの高峰が鎮座している。その殆どが未踏のまま残されているか、ごく最近登られたにすぎない。

歴史上、この地に足跡が残されたのは1821年が初めてのことであった。次いで1901年、T・G・ロングスタッフが入域している。1914~1922年イタリア隊や他のヨーロッパ隊など数隊が登山活動を



▲マモストン・カンリ

▼リモI



展開、1946年にはCol.J・O・M・ロバーツが踏査している。その後永年に渡り、この地はクローズされてしまった。1970年代に入って数隊の日本隊がピラフォンド・ラ越えをしてシアチェン氷河に入り、テラム・カンリ(7,462m)を始め数座に登頂するなど、難峰を相手に精力的な活動を展開した。その後再びこの地は長い間入域禁止となる。

1984年、日本ヒマラヤ協会隊は解禁第一号の隊としてこの地に入りマモストン・カンリI峰(7,516m)に登頂した。翌1985年、印英合同隊(ハリシュ・カパディア/ディヴ・ウィルキンソン)はりモIII峰(7,233m)を始め、テロン谷の数座に登頂した。シアチェン氷河上の数座にはインド陸軍隊が登頂している。シアチェン山脈にはその他にもサルトロ・カンリI峰(7,742m)やII峰(7,705m)など魅力的な山がある。

二番目の山群としてサセル・カンリ山群が挙げられる。Col.ロバーツが試登し、東面からインド隊に登頂されている。日印合同隊はサセル・カンリII峰西峰(7,518m)に初登頂している。東峰はこの山域に残された未踏の高峰の一つである。

三番目はリモ山群である。有名なカラコルム峠を越えて中央アジアへと向かう路は、この地域を通っている。チョング・クムダンI峰(7,071m)は1991年、印英合同隊(ハリシュ・カパディア/ディヴ・ウィルキンソン)が登頂しているが、II峰(7,004m)は未だ未踏である。

東部カラコルムの谷はインドとの合同隊に限り許可されており、いずれの峰の登山も前以て政府機関の許可取得が必要である。

インド・ヒマラヤ登山申請概要

1. インド・ヒマラヤ登山を希望する外国登山隊は、最低でも4ヶ月前までにインド登山財団(IMF)へ申請しなければならない。

2. 登山隊は連絡官の同行を義務付けられる。連絡官には相応の装備を支給すること。また、連絡官が希望する場合には登山活動への参加を考慮すること。

3. 登山料は1996年10月26日より下記の通りである。(未踏、既踏に関わらず同料金である)

6,500m以下の山	左記は12人までの料金。13~16人までの追加料金は1人に付き\$300
\$1500	
6,501m~7,000mの山	
\$2000	
7,001m以上の山	
\$3000	

ヌン、クン \$3000

制限地域の山 \$4000

東部カラコルムの山

\$4000 (インドとの合同隊に限る。外国人隊員数は8人を越えてはならない。最多16人まで。)

4. 一隊につき1000ドルの環境保護費をデポジットすること。この金員は登山終了後、連絡官が登山隊が環境保護をしたことを証明することによって返却される。また、一隊につき300ドルの環境税を徴収する。(※1997年11月より1000ドルのデポジットは不要となり、環境税が300ドルから400ドルに変更となった)

5. オープン地域での5,000m以下の山への登山は、IMFへの許可申請や登山料それに連絡官の同行も不要である。トレッキングや6,000mを越える峠越えも(実際には少ないが)、オープン地域の場合には同様である。

6. 1994年以降、キンナウル、スピティ、ラホール、ザンスカール各地域の広範囲やラダックの南部、西南部の山々がオープンされた。この地域には6,600mを超える未踏の山が数多く存在している。同様に、東部クマオンやガルワールも

解説 ハリシュ・カパディア

かなり広範囲に渡ってオープンされた。また、シッキムなどでは州政府が独自に別料金などの徴収を行っている。

※インド・ヒマラヤ参考図書

1. Exploring the Hidden Himalaya ソリ・メタ、ハリシュ・カパディア共著
2. High Himalaya Unknown Valleys ハリシュ・カパディア著
3. Mountaineering in India M・S・コーリー著
その他

※インド・ヒマラヤ関係刊行物

1. The Himalayan Journal 1928年~1998年 (Vol.54) 発行
2. Indian Mountaineering 1978年~1997年 (Vol.33)
3. The Himalayan Club Newsletter 1951年~1997年
4. 他 American Alpine JournalやAlpine Journalなどにインドヒマラヤ登山概要を掲載

インナー・ライン

地図上には、ほぼ国境線に沿って架空の国境線が引かれており、外国人はこのインナー・ラインを越えることは出来ないし、インド国籍の者も特別許可を取得しなければ越えることは出来ない。

特別許可を取得した外国人はインナー・ライン内での登山が可能であるが、規則は時々変更になる。現在のおおよそのインナー・ラインは次の通りである。

1. アルナチャル・プラデシュ
全域インナー・ライン内である。
2. シッキム
北部はインナー・ライン内であるが、最近はいくつかの登山隊が入域している。特別規則がある。
3. クマオン
 - a. 東部クマオン(ダルマ谷): インド隊は容易に許可取得できるが、外国隊にはまだオープンしていない。

- b. 中央クマオン：ミラム氷河～ミラムはオープン地域。カラバランド氷河、下部ミラム氷河、ナンダ・デヴィ東峰などもオープン。この地域には幾つかの高峰や未踏峰がある。
- c. 西部クマオン（ピンダリ及びスングルドゥンガ谷地域）：全域オープン。パンワリ・ドゥワール、マイクトリ南壁、チャングーチュ、ナンダ・バハナルなどの山がこの地域にある。
4. ガルワール
- a. 北部の谷：バドリナート以北並びにカメット周辺は依然としてインナー・ライン内のため入域不可。過去幾隊かが合同隊として入域した。
- b. ナンダ・デヴィ内院は環境保護のため入域不可。
- c. ドゥナギリ、ウジャ・チルチュ、パンパティア丘などの中央ガルワールの大部分はオープン地域。
- d. ガンゴトリやバンダール・プンチ谷の山々などの西部ガルワールは全域オープン地域。
5. キンナウル
- キンナウル地方はサトレジ川でほぼ中央から2分されている。サトレジ川の西側及び北側は全域オープン地域である。ヒンドゥスタン・チベット道路は現在では全路線車で走れる。東部の谷はバスパ谷ではチャラン・ガティを横断してチトゥクルまでのように、グループで入域できるようになった。ファワラランやジョーカンドン山群など、全山登山が可能となった。
6. スピティ
- ピン谷、ラタン谷、ギンディ谷などのように多くの大谷のあるスピティ川の西側のスピティ西部はオープン地域である。シムラからスピティに北上する場合には、外国人は4人以上のグループであること。マナリからの場合には規制はない。
7. クル
- マニカラ、ディビボカリ、トス・ナラを含む全域オープン地域。
8. ラホール
- 全域オープン地域。

9. キシュトッワール&カシミール
- 本来オープン地域ではあるが、カシミールの近年の政情から登山は制約を受けている。
10. ザンスカール
- 全域オープン地域。
11. ラダック
- a. パンゴン湖などのラダック東部は許可を取得すれば入域出来る。
- b. ルプシュ南東部はオープン地域。この措置により、ルンセル・カンリやチャムセル・カンリ、クーラなどの多くの山々の登山とトレッキングが可能となった。
12. 東部カラコルム
- a. ヌブラ谷ではサソマまでは、外国人4人以上のグループであれば、簡単に入域許可を取得できる。従ってサセル・カンリ西峰ベースキャンプや周辺の僧院を訪れることができる。
- b. シアチェン氷河やリモなどへの入域許可取得はかなり難しい。インドとの合同隊以外の入域許可取得は不可能である。

インナー・ラインの位置は時々変更になる。現在、登山やトレッキングの対象となるインドヒマラヤのかなりの地域はオープンされている。また、インドとの合同隊の場合には、殆どの地域での登山許可取得が可能である。

■連絡先

登山許可申請関係

The Indian Mountaineering Foundation,
Benito Juarez Road, New Delhi-110 021
Phone : 91-11-4671211 FAX : 91-11-6883412
E Mail : indmount@del2.vsnl.net.in

■情報案内

The Himalayan Club,
P.O.Box 1905, Mumbai-400 001
Phone : 91-22-2612462 FAX : 91-22-2085977

■問い合わせ

Harish Kapadia, (Hon.Editor),
The Himalayan Journal,72, Vijay Apartments, 16, Carmichael Road, Mumbai-400 026
Phone : 91-22-4950772,4932927
FAX : 91-22-4968804, 2013227, 2002963
E Mail : harish kapadia@gems.vsnl.net.in

月刊「ヒマラヤ」表紙写真「山」一覧表 (280号～318号)

号数	山名	標高	国	撮影者	撮影場所など	
280	ネムジュン	7,139	N	田辺 治	ギャジ・カン頂上	西面
281	ギャジ・カン	7,038	N	田辺 治	マナスル西面BC	東面
282	マナスル	8,163	N	田辺 治	ギャジ・カン頂上	南西面
283	ブンギ	6,535	N	田辺 治	マナスル西面BC	
284	コングール	7,719	C	谷田川 武	スバシ3,800m	南面
285	ムスターグ・アタ	7,546	C	谷田川 武	小カラクリ湖3,700m	北西面
286	ネムジュン	7,139	N	田辺 治	マナスル西面BC	
287	ティリッチ・ミール	7,706	P	絵ハガキ	グール・ラシュト・ゾム東峰	西面
288	シニオルチュー	6,887	I	東北大学	シニオルチュー氷河	北面
289	シックル・ムーン&ブラマー I		I	中川 裕	ヌン西稜5,800m	北面
290	プマリ・チッシュ	7,492	P	登山隊	ヤズギル氷河	北西面
291	カン・リンポチェ		C	絵ハガキ		北壁
292	サラ・シュワ	6,238	I	沖 允人		
293	ガウリ・シャンカール	7,134	C	写真集	4,500m	北面
294	ラブチュ・カンII		C	登山隊	西稜6,700m	東面
295	ミニヤ・コンカ無名峰	6,134	C	山森 欣一	ヤンズーコー氷河BC3,950m	
296	チベット自治区ゲニ・フェン	6,177	C	中村 保		
297	タカルゴ	6,793	N	野沢井 歩	バルチャモ	南面
298	マッシュャーブルム	7,821	P	関根 幸次		南面
299	ニェギェ・カンサン	7,050	I	インド隊		南面
300	ヒムルン〜ネムジュン〜マナスル		N	菊地 薫	ブリクティ・サイル頂上	西面
301	カバン	6,717	C	山森 欣一	マ・ラ (5,123)	北面
302	ディラン	7,257	P	岩崎 洋	ヒナルチュ氷河	南面
303	ペリ・ヒマールの山々		N	野沢井 歩	チュルー南東峰 (6,400m) 頂上	西面
304	ガウリ・シャンカール	7,034	N	江尻 健二	ハヌマンテ・ピーク (3,080m)	南西面
305	ムスターグ・アタ	7,546	C	岩崎 洋	東面氷河	東面
306	ランタン・リルン	7,225	C	山森 欣一	西面3,000m	西面
307	チュルー東峰	6,584	N	野沢井 歩	南東峰の北東稜	南東面
308	ウルタルI & II		P	岩崎 洋	ディラン頂上	南面
309	クーラ・カンリ (I、II、III)	7,538	C	山森 欣一	南面チュジマイ付近3,980m	南面
310	クーラ・カンリ (I、II、III)	7,538	C	山森 欣一	北面モンダ・ラ (5,266m)	北面
311	ターラ・リ	6,777	C	太田 康夫	扎日の裏山	西面
312	ヤンラ・カンリ(ガネッシュ主峰)	7,429	C	山森 欣一	マ・ラ (5,123m)	北東面
313	カルジャンC&N	7,018	C	山森 欣一	扎日4,250m	北面
314	ニンチン・カンサ	7,206	C	野口 道雄	西面4,600m	西面
315	ニルカント	6,596	I	松山 昭	マジナ4,560m	北壁
316	アイカチェ・チョック	6,500	P	山森 欣一	ハチンダール・キッシュ5,000m	西面
317	バラクン	6,471	I	松山 昭	マジナ4,560m	南面
318	K 2	8,611	P	古関 正雄	スキルブルム	西壁

1998年パキスタン登山隊一覧表 (追加)

山名	標高	国別	隊長名	人数	期間	備考
K 2	8,611	アメリカ	Heidi Hawking	4	6/15～	
ナンガ・バルバット	8,126	日本	小西 浩文	2	6/ 1～	
〃			Alexandru Floriciofu	14	5/ 1～	
ガッシャーブルム I	8,068	デンマーク	Henrik Jessen Hasen	5	6/ 1～	
ブロード・ピーク M	8,051	スペイン	Jose Rantonio Martinez	9	5/25～	
ディスタギル・サール	7,885	イギリス	Jonathan Pratt	4	6/15～	
ティリッチ・ミール	7,706	ハンガリー	David Klein	2	5/15～	
カンピレディオール	7,168	パキスタン/英国	Rep Robson	5	7/20～	
サボイア・カンリ	7,263	イギリス	Ruaridh Pringle	6	7/ 1～	スンマ・リ
スパンティーク	7,028	イタリア	Cino Deua Casa	10	7/ 1～	
ラトック III	6,949	アメリカ	Jordan K.Smith JR	6	6/ 5～	

提供：日パトラベル

H A J 図書と地図の販売

■図書

1. 雪の住処30年の記録 B 5判 442P 3,500円
2. 知られざる北部シッキムの山々
B 5判 82P 2,240円
3. 東部カラコルム B 5判 103P 2,240円
4. ナムチャ・バルワ B 5判 56P 2,240円
5. 天壇の山に挑む B 5判 140P 2,810円
6. ヒマラヤ、そして仲間達へ、
B 5判 88P 1,810円
7. “神の河”ブラマプトラの激流を下る
B 5判 74P 2,740円
8. 烈風の彼方へ佐久間隆遺稿追悼集
A 5判 140P 1,740円
9. 雪域神山 (チベットの山写真集)
A 4判 237P 6,700円
10. 天壇の山に挑む B 5判 128P 2,810円
(1991年ミニヤ・コンカの記録)
11. 麗しき四川の夏 B 5判 60P 1,240円
12. 崑崙の頂を踏む B 5判 52P 1,240円
13. 玉虚峰に登る B 5判 72P 1,240円
14. 千人の悪魔の峰 B 5判 91P 1,240円
15. 中国登山の手引き B 5判 300P 4,200円

16. ネパール登山の手引き B 5判 145P 2,310円
17. ナンダ・カート1981 B 5判 133P 2,340円
18. 中国登山指南(中文) A 5判 200P 5,000円
(地図が多数入っている)
19. 烈風の彼方へ A 5判 117P 1,740円
佐久間隆 遺稿・追悼集 (冬期マナスル)

■地図 (いずれも中国製で2,000円)

1. チョモランマ
 2. チョゴリ
 3. シシャバンマ
 4. コングルー&ムスターグ・アタ
 5. カン・リンボチェ (カイラス)
 6. ナムナニ (グルラ・マンダータ)
 7. ニンチン・カンサ
-以上は10万分の1で中文のみ-
 8. 青蔵高原山峰図
 9. 中国山峰一覽図
-以上は英文と中文がある-
- (注) 上記は全て送料込みの価格である。

つながる

地域ニュース

《ブータン》

タクツァン寺院炎焼

ブータンの国営新聞が22日明らかにしたところによると、同国パロ空港近くの山中にある、約千二百年の歴史を持つ有名なタクツァン仏教寺院が1997年12月19日夜、炎上した。20日に現場を訪れた同紙のキンレイ・ドルジ編集長によれば、寺院全部が火災で破壊されたわけではないが、主要な建物は燃え落ちて無残な模様だ。ブータンでは最も神聖な寺として国中からの仏教徒の参拝が絶えない。普段は僧ひとりがいるが、行方不明という。

(1998.4.23 朝日新聞)

《アフガニスタン》

むなしき「長者」

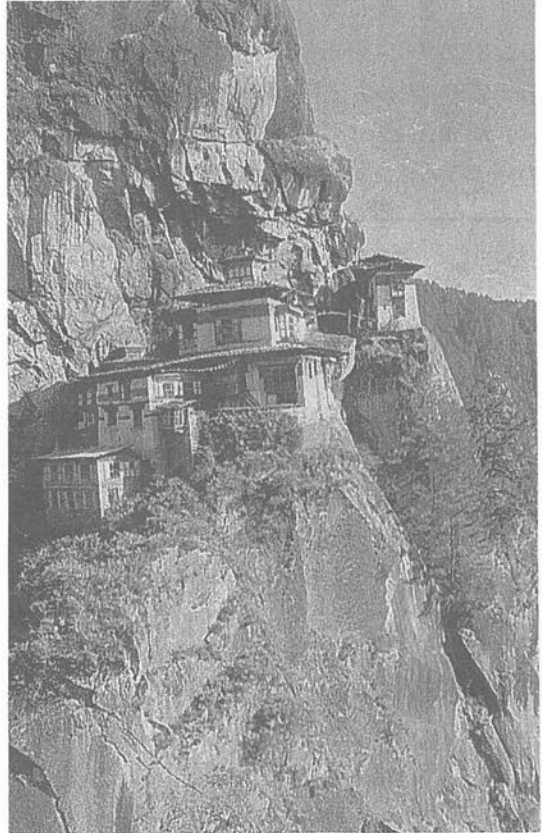
内戦の続くアフガニスタンの通貨は、インフレに次ぐインフレで、貨幣価値が下落を続けている。3年前、1米ドルは約4千アフガニだったが、現在は3万6千アフガニと九分の1の価値に。その分、両替後の札束は分厚くなっている。

わずか30米ドルを両替しても百八万アフガニの札束が目の前にドカーンと積まれる。千アフガニ札なので高さは約18センチもある。

首都カブール市内でごく短距離、タクシーに乗ったら3万アフガニ。ミカンを10個買っても2万アフガニ。何度かバザールで買い物をするうち、商人たちは万の単位からゼロを3つ省いて、2万ならビス(20)、3万ならティス(30)というように、呼称のうえで自主的デノミをやっているのに気づいた。

この国では億万長者でもドル換算で3千ドル足らず。アフガンを訪れる都度、財布にはいきりきれない札束のためズタ袋を持ち歩く。むなしきも悲しき百万長者の気分である。(宇佐波雄策)

(1998.5.1 朝日新聞)



《ネパール》

JAC隊カンチ登頂後遭難

日本山岳会青年部がネパール側からカンチェンジュンガ(8,586m)に派遣した登山隊(谷川太郎隊長(30)以下10名)は、北壁からの登頂を目ざした。C1(5,600m)、C2(6,500m)、C3(7,400m)、ファイナル・キャンプを7,900mに建設。5月14日睡眠用酸素を使用した後、15日谷川隊長以下5名が、午前3時40分出発。メンバーの体調は良好。3ヶ所にのべ5本ロープを固定。9時半から10時半の間に南西面とのウエストコルに到着。ロープを3本固定して、13時30分谷川隊長登頂。以下順次赤坂謙三(30)、椎名厚史(27)、奥田仁一(31)、最後14時20分に広瀬健太(28)隊員が登頂した。天候は良好。下に雲海が広がり、ほぼ無風。

15時下山開始、16時半ウエストコルに到着。ここからスタカットで下ったが、来たときのトレースはほとんど見えない。すぐに椎名隊員の極端な

疲労が目立つ様になり、前向きな下降が困難になり、トラバース気味の下降もほとんど懸垂下降になる。そのため1P下降するのに1時間ほどかかった。22時全員クーロアールの上に到着。1P下った所で椎名隊員が(懸垂下降状態のまま)意識不明となる。24時谷川、椎名でビバーク。残る3名はC4へ向かうが、クーロアール中間部でルートを見失ない、赤坂、奥田がクーロアールの左を探す。広瀬は右へ下り固定ロープを発見。広瀬は他のメンバーと連絡の取れないまま下降し16日3時半C4に到着。お茶を沸したあと疲労のため寝てしまう。4時半赤坂、奥田はルートを見つげられずにいたが奥田が酸素不足のため目がみえなくなりその場でビバーク。3時に谷川はとなりにいる椎名の心臓が停止しているのを確認。5時BCにトランシーバーで報告し、クーロアールを下降する。

明るくなってBCからクーロアール左に全く動かない人影が有ると伝えられるが捜索しても探し出せない。6時にC3から田辺、山本、長久保が救助に向かう。6時半谷川が赤坂の所まで下る。頭部と口から出血、ザックが20~30m離れた所にあったが落ちて行った。赤坂は錯乱状態であったのでロープをつけさせC4へ向かおうとするが、斜面を10数回転倒し、最後は歩行困難となる。

16日午前9時半、田辺隊員がロープにぶら下がった赤坂を支えて斜面に座らせると息を引き取った。8時半広瀬がC4から酸素一式を持って出発。10時広瀬から酸素を受取った田辺がクーロアールを登り、中間部から2P固定して左下へ下降して16時奥田と合流。酸素を吸わせると目が見えるようになった。17時にC4へ帰幕した。

(以上谷川隊長の概要報告)

期間限定9座をオープン

ネパール観光省は、今年がネパール観光年のため新たに9座の山を「期間限定」でオープンした。条件として①許可申請書提出、②推せん状必要、③隊員バイオ・データ提出、④キャラバンと登山ルート地図提出、となっている。また、登山料は免除、連絡官なしで、これらが適用される期間は、

1998年6月1日~99年12月31日までとなっている。

限定オープンの山々

	山名	標高	備考
1.	Yala	5,732m	Rasuwa
2.	Chhukungri	5,556m	Solukhumbu 5,550m
3.	Gokyori	5,400m	" 5,450m
4.	Ramdrong	4,499m	Lamjung
5.	Drahmo	6,855m	Taplejung
6.	Ramchaur	4,500m	"
7.	Ramtang	6,601m	"
8.	Tengkoma	6,215m	"
9.	Kangtokla	6,294m	Dolpo

《中国》

チョモランマ登頂相次ぐ

春に登頂をめざして入山した昭和山岳会隊(小野寺齊隊長ら11名)と、労山隊(近藤和美隊長ら12名)は、5月18日北稜から登頂に成功した。登頂者は昭和山岳会隊の中島俊弥(33)、阿部訟二(34)両隊員、労山隊の倉橋秀都(38)、佐藤賢(44)、永田幸一(40)、坂本正治(38)、橋本久(45)の5隊員である。なお19日にも昭和山岳会隊の小野寺隊長(47)、上村博道(33)隊員が登頂した。また、20日に労山の第二次隊として、矢野利明(45)、川原慶紀(57)、両隊員が登頂。22日には近藤隊長(56)も登頂した。

ダライ・ラマ制廃止も

インドに亡命中のチベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ14世は25日までに、インディアン・エクスプレス紙のインタビューに応じ「600年前に生まれた制度が現代に合わないのなら、廃止しても当然だ」と述べて、転生活仏(仏などの生まれ変わり)とされる高僧)の最高位であるダライ・ラマ制度廃止の可能性に言及した。

インタビューの中で、ダライ・ラマは「私は民主主義が最良だと信じており、チベットの人々は常に何事にも上からの指示を求めるのではなく、自ら行動に責任を持つよう言っている」と強調。「私の命は永遠でない。人々はダライ・ラマなし

で、独立して生きる覚悟をせねばならない」と述べた。

この発言についてダライ・ラマ事務所は真意を明らかにしておらず、中国政府も反応を示していない。

ダライ・ラマは学僧ゲンドゥン・トッパ（在位1391-1474年）を一世とし、代々、転生者とされる少年を探しあてて系譜を維持してきた。現14世は1940年に即位したが、新中国建国の59年、共産政権に抵抗してインドに亡命。以来チベットの分離独立運動を率いている。

(1998.4.26 東京新聞)

改善兆し一変、中印対立再燃

インド核実験を機に、改善の兆しを見せていた中国とインドの関係が急速に悪化してきた。インド政府は5月20日、ナンビアル駐中国大使を召還する一方、パキスタンのアハマド外務次官が19日まで訪中。中印パの動きが慌ただしさを増す中、中国はマスコミを動員したインド非難のトーンを高め、60年代の中印国境紛争やチベット仏教の指導者ダライ・ラマ保護などをめぐる積年の対印不信感をあらわにしている。

中国が対印不信を強めているのは、インド側が「中国は最大の潜在脅威」などとして、核実験と中国脅威論を関連付けたためだ。核実験直前には、傅全有・人民解放軍総参謀長が初訪印し、双方の信頼増進を強調したばかりだった。

(1998.5.21 読売新聞)

BOOKS

ネパール登山の手引き

ヒマラヤ登山を実践するに当って相手国から登山許可を得なければならない。そのために様々な手続きが必要である。また、登山を成功させるためにも多くの知識が必要となる。

H A Jではこれまで「インド・ヒマラヤの手引き」、「中国登山の手引き」を発行して、登山者の便宜を計ってきた。このたび、この数年ネパール登山を実践している野沢井歩常務理事にネパール

登山の実務について解説してもらった。本書の冒頭に述べられているように、ヒマラヤを取り巻く様々な環境は流動的である。この手引きを盲信せずに前向きに情報を収集し、楽しいヒマラヤ登山を実践することを望みたい。

B 5判 145ページ 1998年5月1日刊

価格 2000円 送料310円(限定200部)

申込み：〒170-0013 豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号 日本ヒマラヤ協会

エヴェレストー非常の最高峰ー

1996年5月、世界最高峰エヴェレストで12人の登山者が遭難死する大惨事が起きた事は、まだ記憶に新しい。邦訳された「空へエヴェレストの悲劇はなぜ起きたかー(ジョン・クラカワー著、海津正彦訳)」を手にした読者もかなりいるだろう。本書はその大惨事に遭遇した撮影隊の記録である。

世界的なクライマーで山岳映画製作者デビット・プレッシャーズ率いるドキュメンタリー映画「エヴェレスト」撮影隊は2年の準備期間の後、IMAXカメラによるエヴェレストでの撮影のために同峰での登山中、件の大惨事に遭遇し、撮影を一時中断して遭難者の救助に尽力した。その後、この悲劇を乗り越えて登頂を試み、一式22kgにまで軽量化されたIMAXカメラによる頂上からの撮影に見事成功した。撮影隊スタッフには、ロベルト・シャウアーや八千メートル峰14座の無酸素登頂を試みるエド・ピースターズ、そして日本人女性の続素美代さんなどが参加している。

因に、IMAXカメラによる映像は従来のスクリーンサイズに映写した場合、はるかに緻密な映像となる。言い替えると、従来の数十倍の大きさのスクリーンに映写できるので、大迫力の画面が期待できる。

大半を占める美しいカラー写真もさることながら、臨場感に富んだ活動の記録、地質学者によるエヴェレストの標高に関する話や高度の人体へ及ぼす影響の話などの専門知識、カトマンズの歴史やエヴェレスト初登頂の逸話などが数多く盛り込まれ、読み手を飽きさせない。

英語版の同書の文章だけを邦訳してあるため、英語版を既に入手済みだと手が遠のくかと危惧したが、やはり手にしたい一冊である。(記：寺沢)
310×240ミリ 256頁 1998年5月15日刊 5千円
日経ナショナルジオグラフィック社発行

ヒマラヤから

チョモランマ便り

ナマステ！

いつもお世話になります。私たちは予定どおりメラ・ピークでの頂上宿泊を含む順応登山を終え、カトマンズで次の準備休養をしておりましたが、ようやく明4月17日チベットへと移動いたします。元気にチョモランマから帰って来たいと思っております。

4/26 労山隊 近藤和美

カンチ便り

マナステ！

皆様いかがおすごでしょうか。こちらは3月29日に、カンチェンジュンガ北壁BCのパンペマに入りました。カトマンズからグンサまで大型ヘリで飛び、キャラバンは、たったの3日間ですみました。1991年春、シッキム側から延べ45日ものキャラバンをしてグリーンレイクのBCをめざしたことを考えると、同じ山とはとても思えません。

4月1日より登山活動を始め、同志会ルートぞいに7日、第1キャンプ(5,600m)を建設しました。C1～C2間にアイスビルディングがあり、同志会は、ほぼ中央を突破していますが、今回はずっとオーバーハングした氷壁となっているため、我々にはルートとなりません。やむなく、アイスビルディングの左はしのクーロワールをルートとしました。ここは、1981年クリス・チャンドラーが使い、昨年各隊も使ったそうですが、上部にハンギング・グレッシャーがあり、氷河雪崩の危険があります。しかし、他のルートは、1979年のイギリスルートにしる、1983年の西ドイツルートにしる、難しすぎて、我々の実力では登れないのはもちろんのこと、長時間落石の危険にさらされ

るため、これまた安全なルートではありません。なるべくスピーディーにクーロワールを通過し、危険を最小限におさえ、それでも会うかもしれないリスクについては甘んじて受けるしかありません。

C2は6,500mに4月17日建設しました。同志会はこちらからロックバンドを登っていますが、我々は、クリス・チャンドラーのルートを使って、北稜に出ました。途中、300mほどカチンカチンの氷壁でした。現在、北稜上、7,300mまでルート工作と荷上げが終わっています。次のローテーションで、C4(7,900mアタックキャンプ)までルート工作と荷上げをし、次の次のローテーションでアタックしたいと考えています。

ところでルートの性質も、北東支稜と北壁では全然ちがいが、同じ山に登っている気がしません。今さらのようにヒマラヤの大きさを感じています。

4月23日 BCにて 田辺 治

おわびと訂正

1. 先月号(319号)の表2(表紙裏)の号数が318号となっております。319号と訂正します。
2. 319号3頁右欄下から4行目の「ティース」を「ティラ」と訂正します。
3. 319号4頁写真説明、左の説明「左から」を「右から」に。右の説明「ウシュバ」を「プシュバ」と訂正します。
4. 319号の11頁「表紙写真」の「121号・カンチェンジュンガM」の撮影者を五百澤智也、撮影場所をBC「山森点」と訂正します。
5. 319号20頁の20番「山野井妙子」さんのガッシュャープルムIをIIに訂正します。

東京集会のお知らせ

日時 6月29日(月)午後7時～
内容 中国、ネパールの春の登山が話題です。
場所 HA Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

9-5 ニンチン・カンサ (宁青抗沙・Ningqin Kangsha)

- * 位置：ラサ (3,658m) の南西約113km
[28° 90' N, 90° 10' E]
- * アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ(4,756m)に登り、ヤムドク・ツォからランカーズの手前でギャンツェ方面に向かい、カロ・ラ(5,036m)を下ると南面のBCである。さらに6kmほど西に進み、公路を外れて北に進むと西面のBCに到着する。ラサからカロ・ラまではジープで4時間半程度。
- * ルートの所要日数：95年南面の福岡大学隊は、7月27日にBCを建設し、キャンプ3つを出して8月17日に登頂した。一方、97年に西面に入ったHAJ隊は、95年の栃木隊ルートに取りつき、7月28日にBCを建設し、キャンプを3つ出し8月17日に登頂した。
- * 山の概念：主峰7,206mの南西稜上にトゥゴロン6,763mがある。北稜上に6,484mのカマ峰、南東稜上に6,570m峰がある。
- また、カルション・チューを挟んだ南方には、カルション6,571m、チャンサンラム6,325m、6,249mのジェイトンソンスムなどがあり、短期間の山登りが楽しめる。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋
- * 山名：チベット語で「幸福の水、幸福の源」の意。ノジンカンサNodjinkangsa、レンリカンサLenrikangsa、ケンカンKyenkan-gとも呼ばれる。

登山の概要

■主峰 (7,206m)

1985年

8月～9月 南西稜 大分県山岳連盟隊
初登頂を目指して9月2日13人で入山。南面氷河下5,000m地点にBC設営。右岸から稜線に出て5,600m地点に10日C1を設営。15日5,950m地点に仮C2を出す。21日南西

稜に入り、6,350m地点にC2を設営した。23日アタックしたが6,800m地点でクレバースに前進を阻まれ断念。同日トゥゴロン峰を目指した松元、中尾両隊員が初登頂に成功した。
[隊長：興田勝幸(41) 伊東亨(55) 宮脇稔(32) 木辺正夫(53) 松元徹(35) 杉山恵治(31) 中尾俊孝(32) 西嶋久貴(30) 浅田誠治(28) 恒松勲(27) 荷宮英二(26) 原勇人(23) 井原真美(25)]
[第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 (大分県山岳連盟 1986年12月刊)]

1986年

4月～5月 南西稜 チベット登山隊

初登頂を目指して4月10日南面4,996m地点にBC設営。18日6,700m地点にACを設営。一旦BCに下降し、27日6,100mのC1を13人が出発しACに入る。28日7時半にACを出発したがテレビカメラマン1名が脱落。9時25分桑珠が初登頂に成功。9時45分他の11名(加布、旦真多吉、小格桑、辺巴、拉旺、旦增、旺多、加措、辺巴扎西、小次仁、普布)も登頂に成功した。

[隊長：羅則以下20名]

[中国登山運動史P286]

1992年

4月～5月 南西稜 自衛隊山岳連盟隊

4月18日5,000mにBC設営。5,600m地点にC1、6,200m地点にC2を設営し、5月4日に隊員1名とチベタン1名が登頂した。
[隊長：大崎直彦以下6名]

[山岳年鑑P51]

1995年

7月～8月 南西稜 日中友好合同登山隊

福岡大学と北京大学の合同隊。先発が7月26日南面氷河下にBC設営。8月7日5,700m地点にC1設営。13日6,300m地点にC2設営。16日6,600m地点にC3を設営して翌日4時20分に石村、矢田、菊池、重川の四名

がアタック。9時20分に登頂した。14時41分に中国側も登頂した。

[隊長：山内一男(58) 川邊義隆(54) 石橋康治(48) 菊池守(40) 石村義男(44) 矢田康史(47) 重川英介(20) 前田亮(18) 堀川明大(19)]

[寧金抗沙峰合同登山隊報告書(福岡大学体育会山岳部・山岳会)]

7月～8月 西面～南西稜 栃木高体連隊

7月28日西面入口4,690m地点にBC設営。29日4,850mにABC設営。8月2日5,750m地点にC1設営。8日6,400m地点にC2設営。11日6,480m地点にC3設営。17日石澤、神島、菅又、ダワ・チリが登頂。19日後藤、稲葉、石塚、深谷、チュワング・ニマ登頂。20日滝田、川崎、猿山、小口、ミンマ・ヌル登頂。

[隊長：石澤好文(43) 神島仁誓(41) 後藤尚(34) 増淵仁一(47) 滝田道明(43) 荒川竜一(41) 川崎真澄(39) 富永孝明(34) 猿山浩(34) 稲葉昌弘(33) 林光武(32)

小口貴文(29) 遠藤洋志(26) 菅又久雄(26) 林祐寿(26) 石塚学(21) 深谷篤志(19) 松島一雄(30)]

[輝ける白き峰(栃木県高体連登山部 1996年3月刊)]

1997年

7月～8月 西面～南西稜 HAJ隊

7月28日西面マヨン部落上の4,850m地点にBC設営。栃木ルートに入り、8月5日C1を5,800m地点に設営。三角岩を越え11日C2を6,400m地点に設営。16日6,500m地点にC3を設営し、翌日志小田、飛田、森山、加藤、高橋、川崎が8時に出発し12時48分登頂。18日にも天城、野口、石川が登頂。

[隊長：天城敞彦(50) 志小田美弘(38) 野口道雄(60) 飛田和夫(51) 森山安次(47) 脇田康治(46) 鮫川太一(46) 石川龍彦(45) 加藤和美(44) 滝田収(40) 高橋敏雄(38) 川崎浩史(33) 森達弥(26)]

[ニンチン・カンサ峰登頂(ヒマラヤ314号 1998年1月号)]

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年	特集
★ 1月号	ぼくの好きな雪の山小屋で
2月号	粉雪わけて爽快山スキー
★ 3月号	駅から登るとっておきの山
4月号	新緑と残雪を求めて5月の山
★ 5月号	山の本、名作をめぐる春山紀行
6月号	高層湿原、もう一つの尾瀬へ
★ 7月号	夏は北海道の花と溪流へ
8月号	真夏に涼を求めて、高原へ
9月号	初秋の単独行の山歩き
★10月号	上信越の紅葉をさぐる
11月号	名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
12月号	冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

平成10年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

日時 平成10年5月30日(土) 13時～14時15分
会場 東京、池袋 かんぽヘルスプラザ東京
出席者 本人出席：遠藤登(顧問)、山森欣一、八木原罔明、尾形好雄、寺沢玲子、中川裕、野沢井歩、八嶋寛、古関正雄(以上理事) 保坂昭憲、中岡久(以上監事) 鈴木正典(山形)、飛田和夫、福田靖(以上埼玉)、岩崎洋(栃木)、鈴木雄一、江尻健二、森山安次(以上東京)、江藤公(静岡)
以上本人出席19名、委任状提出者253名
合計出席者272名。定足数は会員数766名の三分の一256名、よって総会は成立。

総会次第

1) 尾形常務理事の司会で定刻開会。総会に先立ち、午前中に開催された理事会に於て、ご本人の希望により「会長」職の委嘱を解かれた遠藤登前会長からご挨拶を戴いた後、定款の定めるところにより議長には稲田理事長所用のため委任を受けた八木原常務理事があたり、議事録署名人岩崎洋、森山安次両会員を選んで議事に入った。

2) 議事

議案第1号から第6号について山森専務理事から説明がなされ全て満場一致で承認された。理事会報告が有り、平成10年度総会を終了した。

平成9年度事業報告

自 平成9年4月1日

至 平成10年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業(ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与)

1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。
年間200件を越す電話による問い合わせと50件を越える事務所への来訪者へ情報提供と指導を実施した。高齢登頂者について

報道各社の照会が増加した。

2) 文献・資料のレファレンスサービス

一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施した。ヒマラヤ諸国の登山規則・地図・登山記録・登頂者記録等に関する希望者が多い。

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

3月に日山協、労山、JACと「海外登山情報センター」構想について協議し、設立に向けて合意した。従って本協会の「研究所設置」事業については、一旦これを廃止することとした。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業(登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表)

1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査研究

続発する高所登山の事故を分析し、事故防止のために研究成果を「事故と環境対策研修会」を通して発表した。又、ヒマラヤにおける日本隊の死亡事故は、1968年から30年間連続して発生し、97年8月にはスキルブルム峰でベテラン登山家を含む大量遭難が発生し、一般の関心も高まり各報道機関から照会が相次いだ。

2) 高所登山に対する意識調査

アンケートの実施について研究した。

3) 山岳の自然環境を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

各国の実践例について収集した。

2. 出版事業(研究・報告)

1) 各登山隊報告書の発行準備

2) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行準備

3. 関連学術事業

興味ある地域について調査した。

Ⅲ. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

1) サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ(7,206m)」登山隊の派遣

7月20日～8月27日に天城敏彦隊長以下13名を派遣し、8月17日と18日に9名が登頂した。尚、隊員5名が高山病のためラサまで下山し、一名は帰国した。

2) 「ムスターグ・アタ(7,548m)女性登山隊」の派遣

7月16日～8月24日に市川春代隊長以下6名を派遣し、8月16日に4名が登頂した。

3) 日中合同クーラ・カンリⅡ(7,418m)登山隊の派遣

3月25日～5月23日に山森欣一隊長以下7名を派遣し、チベット登山協会と合同にて挑んだが、6,350mで断念した。尚、当初の目的はヤンラ・カンリ(7,429m)であったが、主にアプローチの問題から、チベット側と協議した結果クーラ・カンリⅡへと転進した。

4) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成10年度サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ(7,206m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（関根幸次隊長以下10名）した。

ロ) 平成10年度サマー・キャンプ「ラモ・シェ(6,090m)登山」

夏の登山実施に向けて本格的に隊を構成（酒井國光隊長以下9名）した。

ハ) 平成10年度「カバン(6,717m)登山」

秋の実施に向けて隊員募集を行ったが、応募者が少なく11年度へ延期したが、中国側の要望もあり、秋に山森欣一隊長以下3名を偵察隊として派遣。

ニ) 平成11年度「ナムナニ(7,694m)登山」

夏の実施に向け許可申請を行った。

5) 登山許可申請と取得

高所登山分野での現状を分析しつつ、登山の大衆化の分野の声に応えると共に未知

と困難への挑戦の育成を念頭に、魅力ある高峰について各国へ許可申請を行った。

2. 野外活動事業

1) ヒマラヤ各国の魅力ある地域への踏査、トレッキング隊の派遣について企画準備を行った。

Ⅳ. 定款第4条第4項に基づく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」305号～316号を毎月発行した。（毎号24ページ）

2. 出版事業

1) 30周年記念事業として「雪の住処 30年の記録」を発刊した。（1月）

2) 「ネパール登山の手引き」発刊準備を行った。

3) 「ヒマラヤ教本」の発行準備を行った。

3. 指導・啓蒙事業

1) 日本ヒマラヤ会議の開催

各地の条件が整わず開催出来なかった。

2) 地域ヒマラヤ集会の開催

各地の条件が整わず開催できなかった。

3) 定例集会

東京で毎月開催した。

4) 第19回「インド・ヒマラヤ会議」の開催

2月1日東京・豊島区民センターにて開催。平成9年度隊の報告と情報交換を行った。参加者48名。

5) 第6回「中国登山研究会」の開催

2月8日東京・豊島区民センターにて開催。平成9年度隊の報告と情報交換を行った。参加者32名。

6) 壮行会

計画発表と情報の伝達。ニンチン・カンサ&ムスターグ・アタ隊（7月）

Ⅴ. 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

特に実施しなかった。

2) 代表の派遣

- イ) ニンチン・カンサ隊の渉外として、登山隊に同行して山森専務理事を中国、ラサに派遣した。(7月20日～26日)
- ロ) カシュガルのデボ装備整理のため、ムスターグ・アタ隊下山時に山森専務理事を中国、カシュガルに派遣した。(8月17日～27日)

3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

- イ) 西藏登山協会代表団夕食会(12月)
- ロ) CMA趙建軍副部長と懇談(12月)
- ハ) CMA曾曙生主席と懇談(2月)
- ニ) インド、フカム・シン氏来日(3月)

2. 国内関係団体との協調

- 1) 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HAT-J代表・田部井淳子)と協調して、ヒマラヤの環境保護啓蒙活動を実施した。
- 2) 日山協、JAC、労山と協調して「海外登山情報センター」設立について合意し、委員会にて協議を継続中。
- 3) 日山協を窓口とするネパール、ポカラに建設予定の「国際山岳博物館」に対する資金支援について、日山協、労山、JAC、HAT-J、日ネ協会と「国際山岳博物館関係団体連絡協議会」を組織。
- 4) その他、(社)日本山岳協会等と協力・情報交換等を行った。

3. 組織の整備

専従一人態勢となり、会員事務、機関誌発行事務にほとんどの時間がさかれ、これまでのような、情報収集・整理、将来展望などの時間がとれなくなった。

4. 創立30周年記念事業関係

※1998年1月25日に科学技術館・サイエンスホールにて記念講演(名塚秀二氏、中国登山協会汪鉄銘副主席、ハリシュ・カパディアHJ編集長、神原達氏(ハルカ・グルン元ネパール観光大臣の代理)を行い、関係者に記念の楯を贈った(出席者240名)。夜は、場所を九段会館に移し「祝賀会」を行った(出席者270名)。

また、この日に合わせて、HAT-Jの30年間を纏めた「雪の住処 30年の記録」(B5版 426頁、カラー4頁、モノクロ12頁)を500部発刊した。

*野外活動は中止した。

*引き続き残る3点の出版を予定している。

定款の一部変更について

本会の入退会は原則として自由である。しかし、現在の定款は、社団法人化を目標として定められたものを使用しており、実情にあわない部分がある。その一つに「会員の除名」がある。会費の滞納は実質的には、「退会」の意思表示であるが、現実には「総会」の議決が必要となっている。そこで、今回定款の一部を改正して、会費の滞納をもって自動的に退会処理ができるようにするものである。勿論、未納者に対しては年度内に2～3度の督促をしており、年度末になっても納入のない会員だけが退会となる。

(改正案)

第7条に5.として以下を追加する。

5. 会費を滞納し督促があっても納入されなかったとき。

第8条の1.を削除し2. 3.を繰り上げる。

(改正後の条文)

第7条 会員は次の事由によってその資格を失なう。

- 1. 除名。
- 2. 書類をもって退会届を提出した場合。
- 3. 死亡、失そう宣告。
- 4. 禁治産または準禁治産の宣告。
- 5. 会費を滞納し督促があっても納入されなかったとき。

第8条 会員が次の各号の一に外套するときは、総会の議決を経てこれを除名することができる。

- 1. 本会の会員としての義務に著しく背反したとき。
- 2. 本会の名誉を傷つけ、または本会の目的に著しく背反する行為のあったとき。

平成9年度収支決算書

自 平成9年4月1日
至 平成10年3月31日

I. 一般会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(500,000)	(210,000)	(△ 290,000)
	入会金収入	500,000	210,000	△ 290,000
会費収入		(9,000,000)	(7,212,800)	(△ 1,787,200)
	通常会員会費	6,000,000	5,712,800	△ 287,200
	終身会員会費	3,000,000	1,500,000	△ 1,500,000
事業収入		(16,700,000)	(17,358,979)	(658,979)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	15,000,000	14,723,051	△ 276,949
	指導啓蒙事業	200,000	174,000	△ 26,000
	機関誌発行事業	800,000	1,932,248	1,132,248
	出版事業	500,000	529,680	29,680
	国際交流事業	200,000	0	△ 200,000
	その他事業	0	0	0
雑収入		(502,000)	(572,518)	(70,518)
	受取利息収入	2,000	6,063	4,063
	その他雑収入	500,000	566,455	66,455
特別収入		(5,000,000)	(9,683,000)	(4,683,000)
	財政支援金収入	5,000,000	9,683,000	4,683,000
前期繰越		(△ 5,987,631)	(△ 5,987,631)	(0)
	前期繰越	△ 5,987,631	△ 5,987,631	0
合計		25,714,369	29,049,666	3,335,297

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	決算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,820,000)	(8,385,954)	(△ 434,046)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	158,830	△ 241,170
	電話費	300,000	208,046	△ 91,954
	消耗品・文具費	100,000	23,983	△ 76,017
	営繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	676,921	△ 23,079
	図書費	50,000	61,844	11,844
	貸借料	1,800,000	1,725,900	△ 74,100
	光熱水費	150,000	157,008	7,008
	会議費	20,000	38,936	18,936
	広報費	200,000	288,800	88,800
	雑費	100,000	45,686	△ 54,314
事業費		(16,950,000)	(17,668,216)	(718,216)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	13,000,000	14,449,883	1,449,883
	指導啓蒙事業	250,000	101,980	148,020
	機関誌発行事業	3,000,000	2,719,847	△ 280,153
	出版事業	500,000	317,006	△ 182,994
	国際交流事業	200,000	79,500	△ 120,500
	その他事業	0	0	0
特別支出		(5,000,000)	(8,715,932)	(3,715,932)
	30周年記念	5,000,000	8,715,932	3,715,932
次期繰越		(△ 5,055,631)	(△ 5,720,436)	(664,805)
合計		25,714,369	29,049,666	3,335,297

II. 財産目録

(平成10年3月31日現在、単位：円)

種別	摘要	金額
1. 現金		(69,831)
	手許現金	69,831
2. 普通預金		(2,140,650)
	東京三菱銀行新宿支店No.4455421	450,012
	第一勧業銀行高田馬場支店No.1099791	1,690,638
3. 郵便振替		(534,083)
	00100-6-48954	534,083
4. 備品		(200,000)
	事務所備品	200,000
5. 登山装備		(1,200,000)
	事務所	200,000
	中国・デボ	800,000
	インド・デボ品	200,000
資産合計		4,144,564
6. 未払金		(1,300,000)
	柴田金之助	100,000
	中坪印刷	1,200,000
7. 預り金		(165,000)
	新入会者 11名	165,000
8. 借入金		(8,400,000)
	柴田金之助	2,000,000
	植松秀之	600,000
	小島守夫	500,000
	渡辺斉	300,000
	稲田定重扱い	5,000,000
負債合計		9,865,000
差引正味財産		△ 5,720,436

貸借対照表

(平成10年3月31日現在、単位：円)

借方		貸方	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
現金	69,831	未払金	1,300,000
普通預金	2,140,650	預り金	165,000
郵便振替	537,083	借入金	8,400,000
備品	200,000	次期繰越欠損金	△ 5,720,436
登山装備	1,200,000		
合計	4,144,564	合計	4,144,564

平成10年度事業計画書（案）

自 平成10年4月1日

至 平成11年3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存及び、それらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

1) 会員内外に対する情報提供と踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

2) 文献・資料のレファレンスサービス
一般的に入手しづらいものに限定してサービスを実施する。

2. ヒマラヤ登山情報センター事業

21世紀を展望し、日本の各団体の協調による情報管理機構の設立について合意したので、この実現に向けて積極的に取り組む。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

1) 高所登山における事故防止に関する調査研究

2) 高所登山に対する意識調査

3) 山岳の自然環境を汚染しないで実施する登山・踏査活動の研究

2. 出版事業（研究・報告）

1) 「日中合同登山隊報告書」の発行（7月）

3. 関連学術事業

興味ある地域への派遣準備

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査等の団体の派遣）

1. 高所登山事業

1) サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ（7,206m）」登山隊の派遣

7月19日～8月25日、関根幸次隊長以下10名を派遣。

2) サマー・キャンプ「ラモ・シェ（6,090m）」登山隊の派遣

8月1日～8月23日、酒井國光隊長以下9名を派遣。

3) 「カバン（6,717m）」偵察隊の派遣

10月10日～11月4日、山森欣一隊長以下3名を派遣。

4) 直轄プロジェクトの推進

イ) 平成11年度サマー・キャンプ「ニンチン・カンサ（7,206m）」登山

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

ロ) 平成11年度サマー・キャンプ「チョム・カンリ（7,048m）」登山

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

ハ) 平成11年度「カバン（6,717m）」登山

秋の登山実施に向けて隊を構成する。

ニ) 平成11年度サマー・キャンプ「ラモ・シェ（6,090m）」登山

夏の登山実施に向けて隊を構成する。

5) 登山計画の策定と許可申請及び取得

我国の昨今の高所登山分野での現状を分析しつつ、登山の大衆化の分野の声に応え、一方の柱となる未知と困難への挑戦の分野の育成を念頭においた魅力あるヒマラヤの高峰について、企画立案を行いそれぞれの国に対して前年に引き続き登山許可申請を行いこれの取得を行う。

2. 野外活動事業

1) 会員の要望を調査し、ヒマラヤ各国の魅力ある地域踏査隊の派遣を企画立案する。

IV. 定款第4条第4項に基づく事業（機関誌、その他の刊行物、登山・野外活動、研修・各種の会合によるこの分野の健全な発達を図るための指導・啓蒙活動）

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」317～328号を毎月発行する。
（毎号24ページ）

2. 出版事業

1) 「30周年記念」として ★ヒマラヤ登山 日本隊のまとめ ★ヒマラヤ登山 日本隊遭難事故事例集 ★機関誌「ヒマラヤ」総索引を順次発行

2) ネパール登山の手引き（5月）

3) 「ヒマラヤ教本」の発行準備

3. 指導・啓蒙事業

1) 日本ヒマラヤ会議の開催

各理事・評議員と協議し、条件が整い次第随時開催する。

2) 地域集会・定例集会の開催

東京（毎月）、各地域評議員と協議して随時開催する。

3) 第20回「インド・ヒマラヤ会議」の開催

平成10年度隊報告と、11年度計画隊の情報交換。

4) 第6回「高所登山 事故と環境対策研修会」の開催

4月5日開催済み。

5) 第7回「中国登山研究会」の開催

平成10年度隊報告と、11年度計画隊の情報交換。

6) 公式報告会

東京にて実施する。

7) 家族会と壮行会

各登山隊について実施する。

V. 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

1. 国際交流事業

1) 外国代表の招請

渉外上必要と認められる代表について慎重に検討し随時招請する。

2) 代表の派遣

イ) ニンチン・カンサ隊の渉外として、登山隊と同時に山森専務理事を派遣する。
（7月19日～7月27日）

3) 各ヒマラヤ諸国の関係者との交流

来日したヒマラヤ諸国の登山関係者や在日大使館、その他の国の登山者と随時懇談する。

2. 国内関係団体との協調

イ) 日山協、労山、日本山岳会、各岳連、HAT-J、日本登山医学学会その他関係諸団体と随時事業提携・協力・情報交換を行う。

ロ) 登山共済、雪崩などの分野について、登山者が一致団結してスケール・メリットを生かせるような機構の設立に協力する。

3. 組織の整備

1) 常務理事を中心とした事業分担制の検討。

2) 事務局支援態勢の確立。

3) 財政強化の対策。

終身会員への移行の推進。

4) 新規会員拡大の強化。

平成10年度役員等名簿

（任期は平成11年度まで）

[顧問] 古原和美（長野）柴田金之助（岐阜）遠藤登（東京）

[理事] 17名。理事長・稲田定重（福島）専務理事・山森欣一（東京）常務理事・八木原 窓明（群馬）尾形好雄（東京）寺沢玲子（埼玉）中川裕（東京）野沢井歩（神奈川）以上常務理事会構成メンバー
理事・大内論文（北海道）八嶋寛（宮城）植松秀之（山形）名塚秀二（群馬）酒井 國光（茨城）古関正雄（神奈川）田辺治（愛知）林雅樹（京都）南勲（大阪）名越實（広島）

[監事] 保坂昭憲（福島）中岡久（埼玉）

[評議員] 18名。阿部淳・辻野治子（北海道）松館正義（青森）丸山芳雄（秋田）那須宗一・菅原和明（山形）小島守夫（栃木）渡辺斉（埼玉）鈴木雄一・坂上利明・橋本康弘（東京）上原昭則（山梨）西嶋鍊太郎（石川）中村正勝（長野）大西保（大阪）今村裕隆（山口）国沢鎮雄（高知）下田泰義（長崎）

遠藤登会長退任、顧問へ就任

5月30日開催の理事会において、遠藤登会長から申し入れのあった「退任」についてご本人出席の上協議された結果、諸般の事情を熟慮した結果、この申し入れを受け入れることを決めた。ただちに「顧問」への推せんを行いご本人の同意を得て委嘱が行われた。

遠藤登前会長は、昭和59年5月19日副会長に就任され、平成2年5月26日第二代目の会長に就任14年間の長きに渡って会を指導されてこられた。今後は顧問として助言を戴くことになる。

平成10年度収支予算書

都道府県別会員数

自 平成10年 4月1日
至 平成11年 3月31日

(平成10年 5月20日現在・除名後)

I. 一般会計

(収入の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
入会金収入		(500,000)	(500,000)	(0)
	入会金収入	500,000	500,000	0
会費収入		(9,000,000)	(9,000,000)	(0)
	通常会員会費	6,000,000	6,000,000	
	終身会員会費	3,000,000	3,000,000	0
事業収入		(16,700,000)	(16,700,000)	(△1,400,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	13,600,000	15,000,000	△1,400,000
	指導啓蒙事業	200,000	200,000	0
	機関誌発行事業	800,000	800,000	0
	出版事業	500,000	500,000	0
	国際交流事業	200,000	200,000	0
	その他事業	0	0	0
雑収入		(302,000)	(502,000)	(△ 200,000)
	受取利息収入	2,000	2,000	0
	その他雑収入	300,000	500,000	△ 200,000
特別収入		(0)	(5,000,000)	(△5,000,000)
	30周年記念	0	5,000,000	△5,000,000
前期繰越		(△ 5,720,436)	(△ 5,987,631)	(267,195)
	前期繰越	△ 5,720,436	△ 5,987,631	267,195
合計		19,381,564	25,714,369	△6,332,805

(支出の部)

(単位：円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(8,820,000)	(8,820,000)	(0)
	給料手当	5,000,000	5,000,000	0
	旅費交通費	0	0	0
	通信運搬費	400,000	400,000	0
	電話費	300,000	300,000	0
	消耗品文具費	100,000	100,000	0
	宮繕備品費	0	0	0
	印刷製本費	700,000	700,000	0
	図書費	50,000	50,000	0
	貸借料	1,800,000	1,800,000	0
	光熱水費	150,000	150,000	0
	会議費	20,000	20,000	0
	広報費	200,000	200,000	0
	雑費	100,000	100,000	0
事業費		(16,150,000)	(16,950,000)	(△ 800,000)
	野外活動事業	0	0	0
	高所登山事業	12,600,000	13,000,000	△ 400,000
	指導啓蒙事業	150,000	250,000	△ 100,000
	機関誌発行事業	2,800,000	3,000,000	△ 200,000
	出版事業	500,000	500,000	0
	国際交流事業	100,000	200,000	△ 100,000
特別支出		(0)	(5,000,000)	(△5,000,000)
	30周年記念	0	5,000,000	△5,000,000
次期繰越		(△ 5,588,436)	(△ 5,055,631)	(△ 532,805)
	次期繰越	△ 5,588,436	△ 5,055,631	△ 532,805
合計		19,381,564	25,714,369	△6,332,805

北海道	58(3)	58(3)	三重	5	46(4)
青森	8(1)		和歌山	4	
秋田	7(1)		奈良	3	
岩手	7(1)		滋賀	7	
宮城	16(2)		京都	17(2)	
山形	26(5)		大阪	24(1)	
福島	27(6)	91(16)	兵庫	20(2)	75(5)
栃木	17(2)		岡山	3(1)	
群馬	41(14)		広島	11(5)	
茨城	16(2)		鳥取	3	
埼玉	43(11)		島根	0	
千葉	29(6)		山口	5(2)	
神奈川	59(12)	205(47)	香川	4(1)	
東京	159(30)	159(30)	愛媛	2(2)	
山梨	8		徳島	0	
新潟	1		高知	5(1)	33(12)
富山	7		福岡	27(2)	
石川	11(2)		佐賀	3(1)	
福井	4		大分	4	
長野	23(4)	54(6)	長崎	7(1)	
静岡	6		熊本	1	
愛知	27(2)		宮崎	2	
岐阜	8(2)		カナダ	1	45(5)
国外会員	12		総数		766(128)

* ()内は終身会員数

* 総数766名(内、夫婦会員32組)その他に外国会員12名。

藤江幾太郎、第42回山の画展のお知らせ

期日 7月1日(水)～7日(火)

11時～18時30分(日曜、最終日は17時)

場所 朝日アートギャラリー ☎03-3535-7740
JR有楽町、地下鉄丸の内線銀座C4出口
朝日旅行センター隣

ネパール及び国内の山と旅で描かれた新しい作品20点を発表します。

■ 寸 感 ■

カンチェンジュンガで残念な遭難事故が発生した。老いも若きも8千m峰登山でハイポーターにルートを確認させ荷上げを頼み、アタックにも同行させる登山が流行している中で、自らルートを開拓し、ハイポーターを使わず、睡眠用に酸素を使用するが行動用には使用しない、という意欲的な登山を実践していたのであるが、登頂後にアクシデントが発生した。その模様的一端を隊長の報告から知ることが出来た。このように意欲的な企画も遭難によってマイナスの面だけが強調され勝ちである。今後も意欲的な企画が続くことを祈る。

(山森)

事務局日誌 (5月)

- 1日(金) 「ネパール登山の手引き」発刊
- 5日(水) 中国登山協会に創立40周年の祝電をFAX
- 8日(金) ヒマラヤ319号発送
- 10日(日) シルバータートル、ガッシャーブル

- ムII壮行会(於東京、遠藤、山森)
- 22日~23日 登山医学シンポジウム(於松本、山森、中川)
- 25日(月) 東京集会(18名)
- 30日(土) 理事会(於ルーム)、総会(於かんぼヘルスプラザ東京
「フカム・シン氏を偲ぶ会」(於かんぼヘルスプラザ東京)
- 31日(日) ニンチン・カンサ隊、ラモ・シェ隊、カバン隊梱包(於ルーム)

ヒマラヤ No.320 (7月号)

平成10年6月10日印刷 10年7月1日発行
 発行人 稲田 定重
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがご答えます。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004